

〈原著論文〉

王朝人の見た超新星現象

—SN1006の場合—

片山 剛

要旨

平安時代中期の、いわゆる撰関時代を代表する政治家である藤原道長は生涯のうちに何度も天体運行の異常に遭遇している。中でも寛弘三年(一〇〇六)に出現した客星は超新星、天体物理学で言う「SN1006」であることが確認されており、これは過去に地球上から観察された天体の中では、太陽と月を除くと空前絶後の明るさを持つものであった。

本稿では、その「異変」に対して道長をはじめとする台閣の構成員がどのように行動したのかを追ひ、社会不安に対処する彼らの政治家としての方法を探る。

キーワード 平安時代、超新星、古記録、藤原道長

科学的な説明の困難な時代にあつて、天体の異常な運行や発現、消滅を社会現象の何らかの予兆と見る形而上的な把握がなされたのはまんだら不自然なことではない。かかる中国伝来の天文学は日本でも定着、発展し、陰陽寮の官人による不断かつ厳密な観測と解釈をもとに、異変があつた場合は国家的な体制で何らかの方策(法会、奉幣、恩赦など)が取られるのが常であつた。いわば規則的な天体の運行よりそれを乱す不規則現象の発見に関心が集中し、それが地上の生活との関わりにおいていかに意味づけられるべきかが重視されたのである。「天行不齊(天の運行は整わないものである)」という考えがその事情をよく示しているだろう。

本稿は、平安時代中期、いわゆる撰関時代の最盛期に出現した客星(普段見られない星、の意。具体的には彗星や超新星)に注目し、政府の中枢にあつた人々がそれに出遭つてどのような対処法を探り、その結果としていかなる行動に出たかを史料の中に見ようとしてみるものである。

一、『明月記』の客星記録

平成二十二年(二〇一〇)四月十七日から六月六日まで、前年の東京都立美術館に続いて京都府立京都文化博物館で「冷泉家 王朝の和歌守展」

が催された。藤原俊成自筆の『古来風躰抄』、藤原定家自筆の『拾遺愚草』などとともに、定家自筆の『明月記』が質量ともに圧倒的な姿を見せて注目を集めた。

そして、期間限定ではあつたが、『明月記』寛喜二年(一二三〇)十一月八日条の記事が展示されことも興味深いものであつた。

この日の記事には、数日来見えていた客星に関して定家が安倍泰俊なる人物に問い合わせたことが記され、それに対して泰俊が答えた書状と、その書状に添付されていたと思われる、過去の客星の例を列挙した資料が挟み込まれているのである。

定家の筆になる記事は(以下、古記録類は訓読を試みて引用する)、

八日乙未、霜凝り、天晴る。北山に雪白し。

客星の事不審に依り、泰俊朝臣に問ふ。返事此の如し。曉夕東西の条、驚きて餘り有り。

というものである。「十一月八日、霜は固まり、空は晴れている。北山には積雪がある。客星のことを不審に思つて泰俊に問い合わせたところ、返事

は以下の通り（後掲の書状）であった。『暁夕東西』という点は驚愕して余りある」との内容で、「暁夕東西」は次の泰俊の返書に見える一節である。なお、この客星は十月二十九日に出現したものであった（『明月記』十一月二日条の記事による）。

泰俊からの返書には、

客星、一昨日の夜前、全く現れ候ひ了んぬ。出現以後、去ぬる二日、雲に陰りて見（あら）はれず候ふ。其の外は天快晴にして連日見はれ候ふなり。此の一兩日は、天を引き運（めぐ）ること無く、暁、艮の方に見はれ候ふ。暁夕東西に出現し候ふの条、以ての外。

と記されていた。末尾が整わないのは定家が必要な部分のみを日記の中に挟み込んだためであろうか。原本を精査してはいないが、前掲の展覧会図録に掲載された写真版で見限る限りでは、「以外」で終わる行で書状は切り取られて次の「客星出現例」が貼付されているようにも見える（注1）。それはともかく、書簡であるのためのいわゆる「候文体」を無視して概略を述べると「一昨日の前の晩、客星が完全に姿を見せた。出現以後、十一月二日は雲のために出現しなかったが、それ以外は快晴で、連日現れた。しかもこの一兩日は移動することが無く、暁には北東の方角に見えた。暁と夕暮れに東西の空に見えるとは異常なことだ」という報告なのであった。そして、そのあとに添付された、陰陽寮で調査された過去の「客星出現例」は以下の八例である（注2）。

- a 皇極天皇元年（六四二）七月甲寅（一日）、客星が月に入る。
- b 貞観十九年（八七七）正月二十五日戌時、客星が辟（「壁宿」の謂か？）にあつて、西方に出現。
- c 寛平三年（八九二）三月二十九日亥時、客星が東咸星の東方、一寸ほどの所に出現。
- d 延長八年（九三〇）五月以後七月以前、客星が羽林の中に入る。

e 寛弘三年（一〇〇六）四月二日夜以降、大客星が騎官の中に熒惑（火星）のように輝いて出現。

f 天喜二年（一〇五四）四月中旬以後、客星が觜、参の付近に出現。天閑星のような輝きで歳星（木星）ほどの大きさであった。

g 永万二年（一一六六）四月二十二日亥時、客星が太微宮の中に出現。

h 治承五年（一一八二）六月二十五日戌時、客星が北方に出現。王良星に近く、伝舎星を守る。

ここで問い合わせを受け、返書をしたためている安倍泰俊という人物は、その養父安倍泰忠（安倍晴明から五代の子孫）とともに定家に重用された陰陽寮の官人で、当時漏刻博士。定家のために泰山府君祭を修したり、方違えについて進言するなどの日常の奉仕はもとより、しばしば天変についての情報をもたらしており、定家にとっては欠くべからざる人材であった。こういう人物と連絡を密にするのは、故実先例を重んずる王朝貴族の伝統としても当然のことで、彼らが天体の異常な動きや天変を単にそれとしての興味だけでなく、政治、社会問題の兆候を示すものと捉え、極めて大きな関心を抱いていたことをうかがわせる。

実際、この時の定家は「奇星見はると云々」（『明月記』十一月三日条）との情報を得るや、翌日にはみずから「奇星を見る」（同四日条）という行動に出ており、「此の星朧々として光薄し。其の勢ひ小にあらず」（同）と感想を書きとめている。さらにそのあと泰俊から得た情報として、この客星が織女星の東、天津の艮、奚仲の傍―現代の我々にとつて周知の天体名で言うところの「こと座」や「はくちよう座」の近辺―に出現したことなどを付記している。また、「上下殊に驚き恐るる（身分の上下を問わずひどく驚懼している）」（同五日条）事態に至っていること、先例を見ると寛弘三年（一〇〇六）の例―これが本稿のテーマとなるのだが―は別として、「甚だ不吉」（同日条）な現象であることなども述べており、定家はその関心の流れの中で泰俊に改めて詳細を問い合わせたのであった。

ちなみに、前掲の八例の客星出現の時には

- a 六、八月、大旱魃が起こる(注3)
- b 一月、京畿内で飢饉のため官米を売る
- c 三月、長門国で大風雨による被害
- d 二月、疫病流行、夏、旱魃、六月、内裏清涼殿に落雷(注4)
- h 夏、餓死者が京にあふれる

などの自然災害やそれに起因する出来事があつたことが確かめられる。

『明月記』にはこのほかにも彗星、月や星による犯(後述)、日蝕、月蝕、白虹などについての記事も多く(注5)、目には見えても手に届くはずもない闇の中の異常になんらかの予兆を見ようとするあまりに彼らが募らせていた不安が思いやられるのである。

権力が階層的、地域的に京の貴族から離れ行く時勢にあつて、平安王朝の残像を追い求めつつ生きた藤原定家の一側面がうかがえる、天変に関する一連の記事であつた。その定家から約二百年を遡る撰関時代の最盛期に大きな足跡を残した藤原道長もまた、台閣の主導者としてかかる異変に無関心ではいられず、時としてはそれに振り回されざるをえなかつたひとりである。

二、藤原道長の体験

藤原道長(九六六―一〇二七)が生きた六十一年の間にも天体の異常現象は数多く記録されているが、その中でも特に注目されるものをいくつか挙げておく。

まず、道長十歳の天延三年(九七五)七月一日のことである。初秋の京の朝に恐るべき時間が訪れた。夜が明けて、残暑をもたらす太陽が輝くはずだったが、時間が逆行するように都は再び闇の中に埋没して行つた。皆既日蝕である。『日本紀略』はこの朝を次のように描写している。

卯辰の刻、皆虧(か)く。墨色の如くにて光無し。群鳥飛乱し、衆星悉く見(あら)はる。詔書して天下に大赦す。大辟(だいへき)以下、常の赦に免れざる所の者も咸(みな)赦除せらる。日蝕の変に依りてなり(天延三年七月一日条)

日蝕は卯辰の刻(午前七時前後)に皆既となつた。墨色のように光が消えた。鳥は群れて乱れ飛び、季節はずれの多くの星が姿を見せた。早速詔書があり、大赦がおこなわれた。大辟(死罪などの重罪)以下、平常の恩赦では赦されない者までことごとく赦された。日蝕の変のためである。

日蝕は当時の天文学でもある程度は予想されうるもので、具注暦にもあらかじめ注記されていた。しかし皆既蝕は当時生存していた人には(もちろん動物にも)空前の体験であつたから、驚きと恐怖は並大抵ではなかつた。『日本紀略』があえて人間の動きでなく、群鳥の飛乱を記しているのがそれらを象徴する一文になっているよう。

皆既の継続時間は短ければ数十秒、長くて数分である。しかし、第一接蝕(月が太陽を隠し始める瞬間)から刻々と第二接蝕(太陽が完全に隠された瞬間)に向かつていく時間は少年道長にとって相当大きなショックとともに経過したことであろう。京都を襲つた次の皆既日蝕はほぼ七百年後の寛保二年(一七四二)五月一日のこと(注6)と見られており、こうなると盲亀の浮木とも優曇華の花とも言えそうな邂逅であつた。

天延三年の日蝕にはさらに次のような余波が立つた(引用は全て『日本紀略』)。

- ◆仁王会。日蝕並びに度々の天変に依りてなり(七月十二日条)
- ◆相撲の節、停止せらるべしてへり。天変に依りてなり(七月十三日条)
- ◆七大寺に於て読経有り。去ぬる月の日蝕なり(八月一日条)
- ◆十三社に奉幣す。去ぬる月の日蝕に依りてなり(八月九日条)
- ◆去ぬる安和二年三月廿五日に流罪の輩、召し返さるるの官符を給ふ。去ぬる月の日蝕なり(八月二十七日条)

鎮護国家を祈願するために宮中で仁王経を講ずる仁王会をはじめ、諸社寺での奉幣や読経がおこなわれ、さらには安和の変で流罪となった人々を召還すべしとの官符までが下されたという(注7)。関白兼通以下は、おそらくはこの時天文博士であった安倍晴明の助言も得ながら、国家レベルでできる限りのことをした、ということであろう。不安の大きさと徹底的にそれを打ち消す精一杯の努力が伺われる記録である。

それから十一年後、藤原道長二十一歳の寛和二年(九八六)六月二十三日未明、女御藤原低子が亡くなって失意にあった花山天皇が十九歳にして出家、退位した。『大鏡』『花山院』によると、この時安倍晴明が「帝おりさせたまふと見ゆる天変(天皇が退位されると判断される天変)ありつるが、すでになりにけりと見ゆるかな。参りて奏せむ」と言つてとりあえず式神を内裏に遣わそうとしたが、式神が「ただいまこれより過ぎさせおはしますめり(天皇が晴明宅の前を通るさるようだ)」と答えたこと記している。

晴明はなんらかの「天変」を見て帝の退位を予想していたというのが、この異変について斉藤国治氏は二十二日の夜に「木星(このとき光度マイナス一・七等)がてんびん座のアルファ星(光度二・七等)の北〇・五度のへんに接近していたこと」(注8)を指すものと推定されている。このように惑星が他の天体と異常に接近して、それが〇・七度以内に近づく場合を「犯」と言うのだが、晴明はこの犯を観察して天皇の危機を察したものの、時すでに遅かったことになる。実在すべくもない式神の登場が含まれるために、全体が晴明の超人性にまつわる伝説に過ぎないとの見方もできようが、犯が実際にあったのであれば晴明がそれを知らなかったとするほうがむしろ不自然ではなからうか。誇張はあるにせよ、それが事実を踏まえた上での潤色である可能性を見失ってはならない。

この退位事件は天皇の失意に乗じて外孫の懷仁親王(一条天皇。当時七歳)を速やかに即位させんとした藤原兼家(及びその一族)の陰謀説が強い。兄兼通との確執のために摂関の地位を得られないまま、すでに五十八歳になっていた兼家にとつて生涯最後の大きな賭けという意識があったの

ではないか。計画は、晴明が星犯の勘申を提出する以前に一気に敢行されており、その手際のよさはさしもの天文博士の一枚上手を行くものであった。兼家の子息たちの動きは糸乱れず、兼家の次男道綱が清涼殿に安置されていた神璽と宝剣を懷仁親王のもとに移したあと、三男道兼は夜陰にまぎれて天皇をいざない、内裏を出ている。長男の道隆は指示を出す立場にあったのであろうか。しかし、従四位上左近少将に過ぎなかった五男の道長は関白頼忠に天皇の出奔を報告する役目であったともいわれるが(『愚管抄』)、それが事実であったとしてもまだ千両役者には程遠い立場に過ぎなかったといえそうである。

星の犯は道長のような天体の素人には見分けもつかなかったはずで、彼は晴明が予見していたなどとは夢にも知らず、父や兄たちに言われるままに行動を起こしたのであろう。後になって道長が木星の犯を聞いたかどうかは知る由もないが、彼と天体の異変を結ぶエピソードではある。

さらにその三年後の永延三年(九八九)晩夏から初秋にかけて目を眩るような彗星が出現した。まず関係のありそうな史料を『日本紀略』から抜き出してみる。

- ◆ 彗星東西の天に見(あら)はる(六月一日条)
- ◆ 伊勢以下十一社に奉幣す(六月七日条)
- ◆ 連夜彗星東西の天に見はる(七月中旬条)
- ◆ 改元して永祚元年と為す(中略)彗星の天変、地震の災異を攘ふに依りてなり(八月八日条)

六月一日に現れた彗星はその後長期間にわたって夜空を翔り、七月中旬には連夜その姿を見せた。『諸道勸文』四十五にも「永延三年七月十三日彗星東の方に見はる。数夜を経たり。長さ五尺許り」とあり、長く尾を引く彗星で、もつとも目立ったのは七月のことだったらしい。特にそれと分かる記載はないが、六月七日におこなわれた伊勢以下十一社への奉幣もこの彗星の出現によるのであろう。そして八月には地震の災異とともに彗星のこ

とが原因で改元までおこなわれたと言うのである。王朝人の関心が星に向く七夕の前後の連夜の出現であつたから、道長が見なかつたとは思えない。そして、今や従三位権中納言として台閣に列していた彼は奉幣にも改元にも深く関わる事となつていたのである。

実は、この彗星はいわゆる「ハレー彗星」と考えられている。ハレー彗星はおおよそ七十六年余りを周期として回帰するが、実際この七十七年前の延喜十二年(九一二)の『日本紀略』に「彗星西の方に見はる」(六月十二日条)、七十七年後の治暦二年(一〇六六)の『扶桑略記』に「曉、彗星東の方に見はる」(三月六日条)という記事が見えるのである。あいにく世界的に観測条件のよくなかつた一九八六年のハレー彗星の出現は、道長の見たはずの彗星から九九七年後、十三回目の回帰なのであつた。

このほか、二〇〇一年に文字通り星降るごとく出現して話題となつた「しし座流星群」についても、『日本紀略』長保四年(一〇〇二)は「今夜日月薄く蝕え、終夜流星」(九月六日条)、「今夜子の時より寅に至り、流星」(同七日条)という記録を残しており、同八日条によると道長らが参内して大辟以下の大赦が行われ、解任されていた諸司も本職に復されている。理由としては「三光の怪異に依りてなり」とあるので、(科学的には疑問があるにせよ)薄く出現した日蝕、月蝕とともに流星が問題視されたということになる。もっとも、この日の流星については藤原行成『権記』も記録しており、その八日条では「流星の事」のみを大赦の理由としている。道長はすでに正二位左大臣という一人の人となつて仗議を主導していた。

三、SN1006の出現

天体物理学の分野で「SN1006」と称される超新星現象がある。「SN」はsupernova(超新星)の略語であり、「1006」はその現象が出現した西暦年を示している。日本の元号で言う寛弘三年に当たるこの年に、日本をはじめ中国、エジプト、ヨーロッパ各地などで観測された記録が残っており、現在でもその残骸は直径約五十光年に及ぶ巨大な火の玉として秒速約三千キロメートルでなおも膨張し続けているという(注9)。出

現千年紀となつた二〇〇六年にX線天文衛星「すざく」が詳細に観測、撮影して大きな成果を挙げたことも記憶に新しい。

宇宙で起こる爆発の中でもっとも華々しいと言われるのが超新星現象である。超新星は、スペクトル(分光器によって得られる帯状の光の像)に水素の線が見られるかどうかで、それが観測されないI型、卓越して観測されるII型に分けられる。SN1006はこのI型で、さらにそれを細分類したabcの型のうち、珪素や鉄が見られるa型に属するため、Ia型と称されている。このタイプの超新星は、近接する連星のうち、重力の強い白色矮星(注10)に、もう一方の星から降り積もつたガスが、いわゆるチャンドラセカール限界(注11)を超えた時に起こる爆発と説明されている(注12)。

この超新星現象について冒頭で略記しておいた『明月記』「客星出現例」の全文は次の通りである。

寛弘三年四月二日癸酉。夜以降騎官の中に大客星有り。熒惑の如く光明動耀し、連夜、正に南方に見はる。或は云ふ、騎陣將軍星本体変じて光を増すか、と。

騎官(おおかみ座あたり。さそり座とケンタウルス座に挟まれた位置)の方角というから、南のかなり低い位置、せいぜい高度二十度あたりに出現した客星であつた。熒惑(火星)のように見え、光が動きながら輝き、毎夜南方に現れたとあるが、実際は火星よりはるかに明るかつたと想像され、色も赤い火星とは違って「白青」(後述)とされるので、この比喩は「光明動耀」というきらめきをいうのであろうか。同じおおかみ座にある騎陣將軍が姿を変えて光を増したものという説もあつたのは、いくらかでも異変の社会不安を和らげるべく合理的に説明しようとした結果であろうか。

この客星は中国でも注目されており、『宋史』「天文九」には「氏の南、騎官の西一度に出づ。状半月の如し。芒角あり。煌々として以て物を鑑みるべし」とある。氏宿(注13)の南に出現し、半月のような姿でとがっている

て、明るさでものが見えたという。

SN1006は太陽と月を除くと、かつて地球上で見られた最も明るい光を放ったとされ、地球からの距離を7100光年程度と見た場合、マイナス7・5等にも見えた(注14)とも言われる。ちなみに、現在全天でもっとも明るく見える星はマイナス1・5等のシリウス(おおいぬ座)で、惑星の金星の最大光度でさえマイナス4・7等である。

日本でのその他の記録としては、編纂物の史書では『百鍊抄』に「四月(中略)大星異の方に見はる」、「二代要記」に「去ぬる三月二十八日、戊子、客星騎に入る。色、白青。天文博士安倍吉昌、之を奏す」と見られる。この両書を総合すると、三月の末から四月にかけて、南から南東あたりに白青の客星が出現したことになり、いくらか具体的になってくる。早速奏したのは安倍晴明の子で、その後継者の一人の天文博士吉昌であった。

四、内乱、近臣の過

寛弘三年が初夏を迎えようとするころの天体の異変は京だけのものではなかった。全国的に見られたはずの客星の出現は、天体観測というよりは生活の知恵として雲や星を見上げることの多かったはずの庶民にまで何らかの天の意思として関心を抱かれたものではなかっただろうか。時季はおもしろもこれから稲が育とうかという、多雨も少雨も気になる頃であった。果たして吉兆なのか凶兆か。

藤原道長は超新星の最初の出現についてはその日記『御堂関白記』には何も記していない。そもそもこの時期の『御堂関白記』は記事そのものがあまり多くないのである。比較的長い記事として目立つのは五月十日、十一日のものである(注15)。

丑時許り、広業朝臣来りて云はく、式部丞定佐の為に面を打ち破らるてへり。奇しみ驚きて見る所、上唇大いに腫れ、疵有り。案内を問ふに、文章生定輔云はく、定佐を闇打つに、打たるる後、彼を打つ。事、具さならざるに広業に抗ふ、と云々。内間、通夜閑かならず、と云々。御所

の辺り濫るる由を奏せしむ。又、広業の疵の(由?)、又奏せしむ。召して戒めらるるべきなり。(五月十日条)

早朝定輔返り来りて云はく、通夜御所の辺閑かならず。奇しみ怖れ御す間、広業疵有り。仍て定佐籍を除せらる、と。(五月十一日条)

この日は内裏において不断御読経が始められていたのだが、丑時(十一日未明)に右少弁で五位藏人の藤原広業が道長を訪ね、式部丞で六位藏人の藤原定佐に顔を打たれたと訴えてきた(注16)。道長が驚いてその様子を見ると、広業は上唇をひどく腫らして疵を受けていた。以下の記述はやや分かりにくいのが、現場の状況をやはり六位藏人であった藤原定輔に問うと、何者かが定佐を闇打ちし、事情がわからなかった定佐がたまたまそこに居合わせた広業を加害者と勘違いして殴ったというのであろう。内裏とはいえ、闇の深さは人の区別を拒むほどであった。内裏の中は穏やかならざる空気となったという。道長は御所―すなわち天皇の在所である一条院の北対あたり―が不穏であることと広業が疵を受けたので定佐を戒められるべきであることを定輔に奏上させている。まずは天皇の安全を案じての行動であった。すると翌朝定輔が再度現われて、一晚中御在所付近が不穏であるため天皇が怪しみ恐れていたこと、また悪意の有無はともかく現実には広業が傷を負っていることも理由となって定佐は除籍(殿上人の犯した罪に対して、殿上の簡を削除して、昇殿させない処置)されたと伝えてきた。道長の判断と一致した結論である。

事件のあらましは以上で、あるいは定佐に何らかの恨みを持つ者が闇に乗じて鬱憤を晴らして逃げおおせたということだったのかもしれない。一般的に除籍は「ある期間の謹慎」のような性質を持ち、多くの場合復職が認められるのだが、定佐も六月十三日に宣旨が下されて再昇殿が許されている。定佐は過失を悔いて上司に当たる広業に陳謝もしただろうし、広業も何とか矛を収めたように思われる。むしろ注目すべきは内裏の中の不穏な空気のことである。その空気を醸し出したものは何なのか。定佐をして広業を打たしめた奇行には目に見えぬ妖気のごとき力が働いたというのか。

同じ事件について藤原行成はその日記『権記』に次のような一節を書きとめている。

近日、天変連々たり。申す所、只内乱、近臣の過等の事在るなり。仍て種々の御祈り等の間、此の事有り。大禍転ずる所か。(『権記』五月十一日条)

同様の記事は『日本紀略』にも見え、そこには「近日、天文道、変異頻るに依りて近臣内乱の由を奏す。蓋しその徴か」と記されている。要するに、近日続けて起こっている天変は内乱や近臣の過失があることの予兆であるとの勘申がおこなわれており、そのためにさまざまな祈禱などがなされているおりしもこの事件が起こったというのである。天皇近くの文字通り近臣たる蔵人たちの争いであったが、顔を殴られただけで済んだのは大禍に至ってはいないものの、今後まだどうなるか分からないという口吻である。

ここにいる「天変」は、四月はじめの雷を伴う激しい風雨(『権記』四月一日、二日条)や五月一日の日蝕(『御堂関白記』同日条。ただし、曇天のため正現せず)も含まれていただろうが、客星の出現も当然大きな意味を持つていたはずである。「種々の御祈り」が具体的に何を指すのかは不明だが、五月二日の仁王会、十日の内裏臨時御読経などがそれに当たる可能性もある。仁王会是国家鎮護を目的とする法会であり、しかも今回はその実施が四月二十七日に決められて、わずか五日後におこなわれるという慌しさで(注17)、いかにも緊急に催されたという臨時性がうかがえるのである。また、臨時の御読経に関しては『御堂関白記』五月四日条に「先日承る所の臨時御読経を定め申す由を奏せしむ」とあり、こちらもつい先日諮問のあったことを慌てて定めたように見えるのである。

天変によって仁王会や読経をおこなうのは何ら大げさなことではなかった。天延三年七月の日蝕の際におこなわれたのは既述のとおりであり、今回の客星に関しても、後述するように八月には仁王会や奉幣がおこなわれ

る。また、翌寛弘四年六月初旬に連夜のように見られた流星についても『御堂関白記』同年六月十二日条に「流星の事仰せ有り。奏聞す。(中略)又、仁王会、御読経、奉幣等、同じく行はるべき由を奏聞し、退出す」と記されており、実際その直後の六月二十一日に二十一社奉幣、七月十四日に一条院南殿と東殿における仁王会がそれぞれ催行されていることが、やはり『御堂関白記』から知られるのである。

寛弘三年に戻ると、その後もいくつか気になる事件がある。六月十三日の小除目で前述の殴打事件の加害者であった藤原定佐が本職の蔵人に復したのだが、同じ日に民部権大輔藤原為任が除籍されている。『御堂関白記』はその理由を「去年三月より参内せず。殊なる病無しと云々」としている。「近臣の過」といふべきだろうか。翌十四日には、左馬允当麻為頼が山階寺(興福寺)の莊園の職員を打ったことに反発して、同寺の三千人(他の史料では数百とも)ばかりの僧が為頼の私宅に行つて放火し、路辺の田畑二百余町が損壊されるという出来事があった(『御堂関白記』同日条)。具体的には、興福寺の僧蓮聖と為頼が田の権利について対立し、為頼が大和守源頼親らの力を頼んだ上、興福寺を嘲弄する態度を取ったため、僧らが為頼の家に押しかけ、エスカレートして放火騒ぎになったというもの(注18)。この日の夕方には道長が小刀を踏んで足にけがをするというアクシデントもあった(『権記』十五日条)。道長はみずからの不注意にもさぞかし苛立ったことであろう。さらに二日後の十六日には、左衛門尉藤原文行が血相を変えて道長を訪ね、右衛門督藤原齐信の召しによって法住寺に参ったところ、帯刀正輔に打たれた上、逆に自分が追捕されたと訴えてきた。文行は寺を逃れたあと、追つてきた騎馬の者二十人余りに矢を放たれ、逆に矢を射返すなどの抵抗をしつつ道長邸に逃れてきたのであった。事情を聞いた道長は結局検非違使を呼び、その別当でもあった齐信がみずから土御門第に向いて文行を逮捕している。ただし齐信が縄を打つて徒歩で連行するように命じたのに対し、道長は馬に乘せて衣冠を着けさせた上で連れて行くよう指示している(注19)。道長の冷静さと配慮はなかなか微に入っている。

五、妖気を消つ

このような事件は日常的にいくらでも起こりうるものではあるが、その同時多発性を意識し始めると、その陰に何らかの尋常ならざる原因を探りたくなるものではなからうか。道長自身かなり克明に事実を記しており、偶発した喧嘩では済まされない異常を感じ取っていたのかも知れない。その原因というのは政治のシステムかもしれないし、社会制度かもしれないし、そしてまた現代人には理解しがたくとも、星の運行ひとつであつたかもしれないのである。

『御堂閔白記』は記事を残していないが、寛弘三年六月二十四日に客星に関する勘文(吉凶など)についての調査報告の奏上があつた(『権記』同日条)。そしてこの件に関して七月三日に評定がおこなわれる予定になっていたが、前年十一月十五日の火災で焼損した神鏡改鑄のことで議論が長引いたこともあつたのか、延期となつている。そうこうしているうちに道長は病に陥つた。『御堂閔白記』七月六日条に「悩む所有りと雖も参入す。此の暁、痢病を悩む」、七日条に「暁より痢病。心神例に非ず。仍て罷り出づ。作文停ずと云々」、十一日条に「日ごろ心神、尚、例に有らず」という通りである。道長が六日に無理をおして参入したのは、天皇の物忌のために、七日の作文に参加するためには前日中に参内せざるをえなかつたからである。しかし道長の痢病は収まる気配がなく退出。結局作文は中止となつたのである。中止の理由は明確ではないが、七月に入ってから連日夕立があつて雨量が甚大になつていた(『御堂閔白記』七月八日条)らしく、七日の星は見えなかつたのかもしれない。加えて道長の病悩は大いに興趣を削いだことであろう。この病氣と客星を無理に結びつけることはないかもしれない。しかし、よりよつて星に関わる七夕の作文が中止になつたことに對しては、苦悶しながら自邸に歸つた道長もいくらかの奇しき因縁くらいは感じたのではなかつただろうか。

客星の出現から三か月以上が経過した。『御堂閔白記』にはじめてそれに関する記事が見えるのは七月十三日のことである(以下、引用はすべて

同書)。

諸道の進む大星勘文を定む。定め申して云はく、道々の勘文一同に非ず。又、同じからざるの由を問はれ、御卜せられ、御祈り有るべしてへり。仰せて云はく、行はるべき事如何、てへり。仁王会並びに最勝講、道々の内外の御祈に付すを定め申すなり。仁王会有るべき仰せごとを承り了んぬ。又、御筮を奉仕すべしてへり。(七月十三日条)

客星に関して、天文道や陰陽道などが奏上した勘文についての定めを行う会議である。諸道の勘文は一致していないので、事情を聞いて御卜をおこない、その上で必要な御祈禱を実施すべきだとの結論となつた。なんとしても吉凶や取るべき対策が知りたいのである。天皇が具体的におこなうことについて問うたのに対しては、仁王会、最勝講、そして諸道の祈禱がおこなわれることが定められた。さらに天皇の仰せによつて、仁王会は御卜の結果に関わらず実施が決定し、御筮(『易経』に基づく占い)も奉仕するように、と指示があつた。一条天皇の積極的な関わりも注目されよう。御筮は十五日におこなわれることになつたようだが(『御堂閔白記』七月十四日条)、実際におこなわれたとの記録は見えない。

内府をして大星の御卜を奉仕せしむ。軒廊のみ。申の時罷り出づ。夜に入りて、右頭中将占方等を持ち來たる。凶星と卜せらる。(七月十九日条)

内大臣藤原公季の担当で奉仕せられた御卜はいわゆる「軒廊の御占」で、これは天変などに際して紫宸殿の東軒廊で神祇官の龜卜と陰陽寮の式占によつておこなわれたものである。そして、夕刻帰宅していた道長のもとに、夜になって公季の子で右頭中将実成が占方(占いの結果)を持つて來た。やはり凶星だったのである。ただ、凶星という結果は好ましいものではないにせよ、結果が出たこと自体は次の対処に繋がる意味で前進である。実

際この後はさまざまな対策が速やかに実行に移されている。

まず、すでに催行が決まっていた仁王会について七月二十三日に実施細目を決める定めがあり、法会自体は八月十三日におこなわれた。その合間の八月八日には臨時奉幣のことが定められており、これは『御堂関白記』同日条に「天変並びに日ごろの大星の事なり」とあるように、客星のみならず、天変全体についての祈りとされた。『御堂関白記』によると、七月はかなり雨量が多く、風も強かったことが知られるので、それらも含むのであろう。この奉幣は十九日に八省院から発遣されたのだが、その日も雷鳴があり、さらに二十二日にも「雷電声高き事」（『御堂関白記』同日条）が続くなど、なかなか事態は収拾しなかったようである。そこで次に行われたのはやはり恩赦であった。

右頭中将来りて、仰せて云はく、大星の事に依りて、免者有るべき由を申すに、未だ行はれず。今日行ふべしてへり。承る由を申す。別当を召して勘文を成され、免ぜらると云々。着欽の者九人「六年の者二年を遺す。三年の者一年を遺す」、未断の者九人。（八月二十六日条）

天皇の意向を藏人頭藤原実成が伝えてきた。客星出現に関して恩赦があるべきなのにまだおこなわれていない。そこで今日実施せよというのである。一条天皇という人は状況判断を的確におこないつつ、それを道長に諮って推進、実行しようとする積極性があった。英明といわれる所以であろう。早速、藤原齊信の後任として六月に検非違使別当となっていた（『公卿補任』）藤原懷平が召されてリストが作成され（注20）、着欽の者、未断の者それぞれ九人に対して恩赦が実行された。読経や奉幣の結果、天変が収まっていたら、この恩赦はなかったかもしれない、囚人たちは客星にも雷雨にも感謝したことであろう。

対策のとどめとして実行されたこの恩赦は大きな効果があったと伝えられている。すなわち、九条兼実の日記『玉葉』治承五年（一一八一）七月十五日条に記された兼実の書状に「抑も変異に依りて赦令を行ふこと、其の

例多く存す。就中、寛弘三年客星に依り囚徒を赦すに、果たして以て妖氣を消つ。尤も吉例と謂ふべきか」とあり、「吉例」の代表例とされているのである。囚人を赦すことでしつこく社会に漂っていた妖氣を消すことができた。王朝人が天体の異常に関してのもっとも注目したものは、物理的な異変そのものとともに、あるいはそれ以上にこの「妖氣」だったのであろう。

このあと、冷泉院在所であった東三条第南院が十月五日に焼亡し、同月十一日には山鳥が御所に入ったために陰陽師に占わせるという椿事もあったが、特に内乱のような騒動があったという記録は見当たらず、超新星がゆつくりと減光するように妖氣は消され、社会の動揺は沈静化して行った。秋雨に荒れた天候もまた季節とともに落ち着いていったようである。

九月二十二日には雨の中ではあったが一条天皇が道長の土御門第に行幸、中宮彰子や東宮居貞親王も招かれて競馬御覧があった。十二月には道長の子、教通、能信の元服もおこなわれ、この一年も無事に暮れたのである。

六、結び

すでに述べたように、藤原定家は『明月記』の中で過去の客星について結果論的にその吉凶を判じている。しかしそれは当座の人々にとってはあずかり知らぬことであり、卜占の結果何らかの結論が出てそれはいずれ「予言」の範囲内にとどまる。定家が寛弘三年のSN1006のみをその二年後の敦成親王誕生に結び付けて「皇子降誕の嘉瑞のみ」（『明月記』寛喜二年十一月五日条）と述べたところで、道長時代の人々は安穩としていられるはずもなかったのである。実際、道長は長保元年（九九九）に一条天皇に入内させて以来皇子女の誕生の兆候のない娘彰子にやきもきしつつ、彰子が二十歳になる寛弘四年には金峯山へのいわゆる御嶽詣を試み、「子守三所」にも参詣して幣などを献じ、おそらくは彰子の出産を祈願しているのである。

そしてまた二百年後の定家も、二十一世紀の我々の科学的判断を何も知らぬまま、寛喜一年の客星が示す予兆について不安を抱きつつ夜空を眺めていたに違いないのである。

(注1) 今川文雄『訓読 明月記』第五卷(一九七八年 河出書房新社)は「以ての外に候ふ」と訓じているが「候」の文字は定かではない。また、「以ての外」も、続く文章があったのであれば、それ次第で他の読み方が適当かもしれない。

(注2) 記事の中に見える星や星座のおよその位置は、現在用いられる十八星座でいうと次の通り。

辟	「壁」(壁宿)であれば、ペガサス座、アンドロメダ座
東咸星	へびつかい座
羽林	わし座
騎官	おおかみ座
騎陣將軍	おおかみ座
嘴	オリオン座
参	オリオン座
天関星	おうし座
太微宮	しし座、おとめ座
王良星	カシオペア座
伝舍星	きりん座

また、本文中に掲出した八例のうち、fは中国の『宋史』にもその出現が記録される超新星で、現在も爆発の残骸が「かに星雲」(シヤルル・メシエのカタログに載る、いわゆるM1)として広く知られ、おうし座の右の角(つの)に当たるゼータ星の近くに観測することができる。またhは「3C58」と呼ばれるパルサー(超新星現象の結果残った中性子星とされる)がその残骸だと言われている。

(注3) この時は神社仏事の祈禱、蘇我蝦夷の祈請も効果なく、八月一日に皇極天皇による祈雨がおこなわれるに至って雷雨が五日続き、百穀が成熟したと言う(『扶桑略記』)。

(注4) この落雷によって、早魃対策のため清涼殿の天皇の御前に詰めていた権大納言藤原清貫らが死去したが、これは清貫がかつて太宰府に

左遷されていた菅原道真の監視に関わったりしたため、道真の怨霊が雷神となって殺したものとさえ言われた。醍醐天皇もまもなく病臥、讓位し、九月二十九日に崩御する。

(注5) 齊藤国治『定家『明月記』の天文記録 古天文学による解釈』(一九九九年 慶友社)

(注6) 菅茶山の『筆のすさび』は寛保二年の日蝕について「白昼烏黒にして、星宿爛々たり、さながら夜のごとくなりし」という伝えを紹介している。

(注7) ただし、安和の変で流罪となった主要人物の源高明は天禄三年(九七二)にすでに帰京している。

(注8) 齊藤国治『星の古記録』(一九八二年 岩波新書)

(注9) http://www-cr.sophys.kyoto-u.ac.jp/research/xray/press200612_SNI006_Koyama/

(注10) 太陽の数倍までの質量を持つ恒星が進化の最後で高密度となった一形態。

(注11) インド出身の天体物理学者チャンドラセカールが提唱した白色矮星の質量の上限。現在では太陽質量の 1.44 倍とされる。

(注12) このあたりの記述は尾崎洋二『星はなぜ輝くのか』(二〇〇二年 朝日選書)による。

(注13) てんびん座(さそり座とおとめ座に挟まれる位置)あたりの星宿。

(注14) <http://www.astrophysics.co.jp/News/2003/03/10sn1006/index-j.shtml>

ただし、距離については(注9)の記事には「約6千光年」とある。

(注15) 寛弘三年の『御堂関白記』は自筆本、古写本ともに現存せず、引用は平松本を底本とする『大日本古記録』による。

(注16) 『扶桑略記』同日条によれば笏で打ったという。

(注17) 『御堂関白記』五月二日条に「右大将(実資)、日近しと雖も僧を具す」とあり、日程が迫っていたのに実資が見事に僧を準備した、との意味と思われる。言い換えると、それほど慌てて実施された臨時性の強いものだったようである。

(注18) 内閣文庫蔵『神木動座之記』所引『小右記』六月二十七日条。

(注19) 『御堂関白記』六月十六日条。この事件は『続古事談』(第五・諸道)も伝えており、それによると、文行と正輔が法住寺において先祖のことで諍いを起こし、正輔が盃を投げつけたため文行が太刀を抜こうとしたという。また、文行は、後日関東に下る時、闘争を制止しようとした郎党を殺したともいう。

(注20) 『朝野群載』十一に、寛弘三年七月十七日付の「未断左右獄囚事」についての勘文として「佐賀名胙丸」(罪は闘乱)「伴友助」(罪は竊盗)の名が記録されたものが見える。

Supernova watched by Aristocrats – SN1006—

Takeshi KATAYAMA

Abstract

Fujiwara-no-michinaga, a celebrated politician in the middle of the Heian era, encountered abnormality of heavenly bodies many times in his life.

The supernova 1006, appeared in 1006, shone most brightly in the stars that had been observed from the earth in the past.

In this thesis, how the constituent member of the government (or Michinaga himself) moved to the "Star Accident", and also how they dealt with social unrest are researched.

Key words

Heian era, Supernova, Aristocrats' diaries, Fujiwara-no-Michinaga